

Smile No.1

～授業のユニバーサルデザイン化を目指して～

広島市立己斐上中学校
教頭 網村 敏行

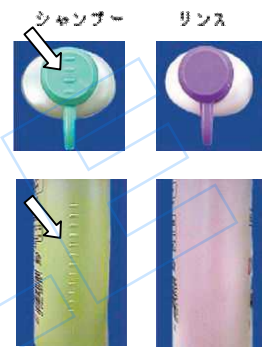
近年、「授業のユニバーサルデザイン化」といった取組が注目されています。これは教科学習と特別支援教育のノウハウを融合させて、特別な支援を必要とする生徒だけでなく、学級全員の生徒に「ない」と困る支援、「ある」と便利な支援を行い「分かる・できる」授業を行う取組です。今後、この「Smile」で、「授業のユニバーサルデザイン化」や網村の気づき等を紹介していきたいと思ひます。御愛読いただければ幸いです。

1 ユニバーサルデザインについて

元々、ユニバーサルデザインとは「すべての人のためのデザイン」を意味しており、デザインの対象を老若男女や障害のある方等、対象を限定して障害の壁を取り払うといった考え方のバリアフリーとは違う考え方です。下記にユニバーサルデザインの例を紹介しします。

(1) シャンプーとリンス

ユニバーサルデザインの考えを取り入れた例にシャンプーがあります。写真のように、多くのメーカーのシャンプーの容器には、ふたや側面にギザギザがついています。これはリンスと区別するためのものです。このギザギザは視覚障害を有する方にとって、触覚で判別することができ、大変便利なデザインです。当然、髪を洗うときは、私たちも目をつむっており同じような状態にあります。つまり、視覚障害を有する方だけでなくすべての人にとって大変便利なデザインです。



(2) 駅構内の表示と電車内の案内図

右の写真は駅構内の表示です。私たちはこれらの表示を手がかりにして、行ったことのない街に行っても、目的の場所に行くことができます。

その下は電車の中の路線案内図です。これも乗ったことのない電車でも今自分がどこにいて、後どのくらいで目的地に着くか、一目で分かります。通過駅のランプが付くタイプであれば、より分かりやすいですよね。

一方、路線バスにはバス内に、この案内図が付いていないものが多く、行ったことのない街では、どの辺を走っているのか、いつ降りてよいか、いくら払えばよいか、どのタイミングで後ろの席から前に行っていくか、非常に不安になった経験はありませんか。



(3) 広島特別支援学校中学部のユニバーサルデザインによる支援の一例

昨年度の広島特別支援学校の中学部では、昼食後にスロープでダッシュに取り組む生徒が増えてきて、折り返し地点で生徒同士が接触する危険性が出てきました。そこで、ある先生がテープを貼って、中央に「ライン」と「矢印」を示したところ、生徒は何も言わなくてもスロープの右側を走るようになり、接触事故もありませんでした。

言葉は音声の記号で、すぐに消えてしまいます。また、ダッシュをしている生徒は自閉症の生徒が多く、特に言葉による短期記憶に弱さがある彼らは「右側」ということが理解できる生徒でも、走っているうちに忘れてしまうこともあります。でも視覚的な情報である「ライン」と「矢印」は消えません。自閉症の生徒の障害特性に応じた支援といえますが、当然、私たちにとっても、分かりやすい支援です。



2 終わりに

上記のユニバーサルデザインの例はちょっとした工夫ですが、「ない」と困る支援、「ある」と便利な支援で、これらのことで私たちは多くのことが「分かる・できる」ようになります。

授業にもこのような考え方を取り入れていくと、より多くの学級の生徒の「Smile」を見ることができるようではないかと思ひます。

今後、「授業のユニバーサルデザイン化」について、少しずつ紹介していきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

Smile No.17

～授業のユニバーサルデザイン化を目指して～

広島市立己斐上中学校
教頭 網村 敏行

梅雨が明け、暑い夏がやってきました。プールではカメムシが異常発生していましたが、梅雨明けと同時にカメムシはいなくなったものの、今度はカラスの大群がプールで水浴びをするようになりました。保健体育科では、大量のカメムシを網ですくい取る代わりに、大量のカラスの羽根を網ですくっておられ、プール管理に大変苦労されています。今回は保健体育科の水泳の授業を紹介します。

1 プールでの視覚的な支援について

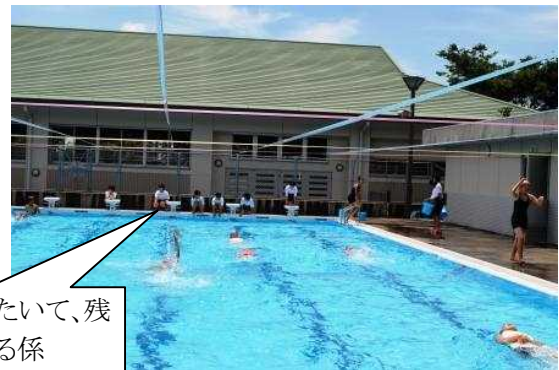


保健体育科では「背泳ぎ」の活動の際、まっすぐに泳ぐことができず、プールを斜めに泳いで他の生徒と接触したり、ゴールまでの距離が分からず、プールの壁にぶつかったりした生徒が過去にいた

ため、「背泳ぎ」の指導の際に、プール上にビニールテープを縦横に張り、生徒がまっすぐに泳ぐことができるように、また、残りの距離がどのくらい分かるように、視覚的に分かりやすくする支援を行っています。効果は抜群で生徒はまっすぐ泳ぐことができるようになり、残りの距離も意識できるようになったそうです。ただ、このビニールテープはカラス除けには効果がないようです。

2 プールでの聴覚的な支援について

背泳ぎで泳いでいるときは、耳が水中にあるため、プール上から大きな声で「ぶつかる！」と叫んでも、泳いでいる生徒には聴こえないそうです。しかし、飛び込み板（鉄板）等をたたき音は水中でも聴こえるそうです。そこで、飛び込み板等をたたき、音で壁に近いことを教える係を作り、聴覚的な支援もビニールテープでの視覚的な支援に加えて行っています。



3 学びのユニバーサルデザインの3原則

学びのユニバーサルデザインの3原則（CAST：アメリカのNPOがまとめた）の一つに「多様な提示方法を用いる」があります。つまり、「全員にぴったり合う方法」などは存在しないため、目からの情報に弱い子（視覚認知、視覚的な記憶、視覚的な注意選択が苦手）への配慮、耳からの情報に弱い子（聴覚認知、聴覚的な記憶、聴覚的な注意選択が苦手）等への配慮もしてあげてくださいということです。

プールでの背泳ぎの活動は目や耳からの情報収集が苦手といったことではありませんが、目や耳からの情報が入りにくい状態にあるため、ビニールテープで視覚的な支援を行い、さらに危険を伴う壁までの残りの距離を確実に知らせるため、聴覚的な支援も行っています。

4 おわりに

学級には様々なタイプの生徒がいます。学びのユニバーサルデザインの3原則の一つ「多様な提示方法を用いる」を意識して、普段から言葉だけでの説明だけでなく、文字や絵も用いたりして、いろんな提示方法を用いて説明することを心がけていきましょう！

Smile No.36

～授業のユニバーサルデザイン化を目指して～

広島市立己斐上中学校
教頭 網村 敏行

今回は12月6日に渡部先生をお迎えして行なわれた第3回特別支援教育推進校に係る研修会から、言語活動の充実という視点で、武下先生と石橋先生の授業の一部を紹介します

1 漢字のフラッシュ読みでの工夫



武下先生は今回、授業の冒頭にパソコンを使って、漢字の読み方の学習を取り入れられていました。以前は漢字の書き取りテストでしたが、当分、授業の冒頭にこの活動を取り入れて、授業の流れをパターン化されるそうです。このソフトは最初に漢字が画面に出て、次に読み仮名が出てきます。出てくるタイミングの速さは調節できるそうです。

この日は20種類程度の漢字を読んでいきました。最初は全員で、ゆっくりのタイミングで読む。次に出題される漢字と読みを記入したカードを配布して、生徒が読みをそれぞれ確認。その後、何人かの生徒を指名して、少し速いタイミングで読むという流れで、見て、聞いて、読むといった多くの感覚を使う学習活動が繰り返しながら展開されていました。

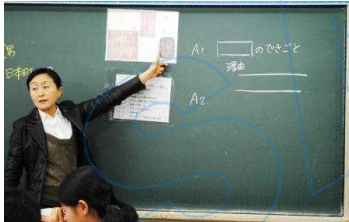
生徒は全員、意欲満々で、全員で読むときも、友達が読むときも画面を一生懸命見ながら友達がどのように読むか興味をもって一生懸命聴いていました。読み終わった後の画面に「よくできました」「エクセレント」等の違った評価が出てくるのも楽しかったようです。ただ繰り返すのではなく、少しずつ変化を付けることで興味を持続させることができたようです。普段授業に参加しにくい生徒も指名されましたが、ほとんどの漢字を読むことができていました。

読む生徒を指名する際は、数字が書いてある棒を丸い筒に入れたアイテムが用意されており、その棒を武下先生が引いて出席番号で指名されていました。何でもよいようなアイテムですが、ひと手間加えることで、生徒の気持ちが切り替わり、興味を持続させることにつながっていました。

(当日はあまりにもうまく生徒に当てるので、数字が書いてないイカサマアイテムかと思っていました。すみません)



2 社会科の協同学習での工夫



石橋先生は班で考える際、左の写真のように、答え方のパターンを黒板に示し、各班に資料を配布して話し合わせ、携帯用のミニホワイトボードに記入し発表するようにするようになっています。考える題材が変わっても班で考えて答えるパターンは同じなので、生徒はスムーズに活動していました。また、考える題材を絞り、カラーコピーして記号を付けた資料を配布して、生徒の手元に置いて考えるようにしたり、思考の対象と思考の方法を明確にして、生徒が考えやすいような工夫がされていました。記号を付けるのも答えやすくする一つのポイントです。



左の写真は翌日の1年生の社会の授業です。石橋先生の授業も小テストから始まります。まず、①小テストの内容(前時の復習)を学習する時間を取ります。その後、②小テスト。次に③班で答え合わせ。そして、④学級全員で答え合わせ。左の写真のように班全員で手を挙げ、指名された班は全員で答えます。短時間ですが、①～④と覚える内容が4回も違った方法で、しかも見て、書いて、聞いて、読むといった多くの感覚を使うので記憶しやすいようになっています。また、このシステムだと一人で発表する勇気のない生徒や、答えが分からなかった生徒も、全ての生徒が参加できます。



3 おわりに

両先生の授業は、一部分しか紙面上では取り上げられませんでした。授業のユニバーサルデザインの視点からの手立が満載でした。渡部先生は「どちらかというと先生が一方向的に話して終わりという授業が多い中学校の授業の中で、生徒との対話で進んでいき、いろんな手立が考えられているこのようなレベルの高い授業を見ることができて大変勉強になった。」と話されていました。思考力を高めるためには一方通行の授業では高まりません。対話が必要となります。言語活動の充実は思考力・判断力・表現力を高めるための手立てです。いろいろ工夫していきましょう！